



H. 28





かまをあゝ画くよはもあけに刻ある  
七の形ちあきおのうら魂あをそ  
おを脱するを深く世人の手とら  
わらうと神佛のたをむハ程ゆか  
更なり風女立体一日やあまうてきし  
乃の石を村を志のいどらぬ新場ふ  
えらうま家のあきよあし向ひら







作之志を記

多きう人の中年よれ初しこれ

巻意翁

細きうと松葉はのりし多道か

素巻

阿道ゆきと時ふ来り新の鐘如響

其角

葉を其きししこれゆきとにけりきん

峯屋

空の羽もかいつくろひぬ初しと道

去来

故人のしとこれけぬ勢田の橋

丈州



有明のあまのついでに  
 忘れぬも又杉風の只押つて  
 玉きやう箱のききゆく  
 押つてききゆく  
 此の縁を掛て悲き時白葉  
 一々もは境急つけ  
 所あまの人少き也  
 淀まるとあまの年行  
 路通

初一忘れぬも  
 あつてやあまの隣  
 見あつてあまの  
 船の縁に掛て  
 一々もは境急つけ  
 新巻のあま  
 板壁あまの縁  
 若の葉の縁

新巻 水枝 支考 野坡 孤屋 柳隣 哉人 路通  
 杉巻 曾良 花岡 龜翁 左那 海峯 史那 此節



一 蓮花のつぼみはさきさきの日影に  
 小松のつぼみは隣りさきの年の芳  
 香のつぼみはさきさきの年の芳  
 一 さきさきのつぼみはさきさきの年の芳  
 耳のつぼみはさきさきの年の芳  
 さきさきのつぼみはさきさきの年の芳  
 鍋屋のつぼみはさきさきの年の芳  
 牛馬のつぼみはさきさきの年の芳

鹿 花  
 香 葉  
 李 由  
 凡 兆  
 土 芳  
 猪 蟾  
 木 芽  
 信 化

一 春のつぼみはさきさきの年の芳  
 深合のつぼみはさきさきの年の芳  
 降初の日さきさきの年の芳  
 鏡持のつぼみはさきさきの年の芳  
 馬のつぼみはさきさきの年の芳  
 院のつぼみはさきさきの年の芳  
 宇治のつぼみはさきさきの年の芳  
 茅根のつぼみはさきさきの年の芳

高 白  
 如 行  
 白 空  
 正 秀  
 乙 妙  
 木 因  
 曲 琴  
 荆 口







朴の末に成にさるるをいへば  
松苗をとりてさるる時をうれ  
炭の末に成に消さるるをいへば  
初にさるる時をいへば  
遠坂の山をいへば  
一僕の特に成にさるるをいへば  
村にさるる時をいへば  
即ちさるる時をいへば  
一矢

時をいへば  
松井の子をいへば  
一にさるるをいへば  
初にさるるをいへば  
遠坂の山をいへば  
一僕の特に成にさるるをいへば  
村にさるるをいへば  
即ちさるるをいへば  
一矢

宇陀郡

三岐

知本

西吹

徳州

安世

調和

一矢

才廣

其常

権子

休斗

喜西

羽江

信徳

牧養



馬の如きは夕の如村に  
 細形のみは井乃浦必殊時  
 月代をいそぐやうに村に  
 松子考はくさうをさるる  
 穴態の如くは門の  
 沖毎の如くは探出さるる  
 今も下はるるやうに  
 和の如くは戸の如くは

北國  
 横江  
 子川  
 在る  
 為る  
 沽圃  
 落格  
 山店

考や一これ子交る  
 和若く又叫ぶる  
 富ふ如くは山  
 紫素や如くは  
 和の如くは  
 時をよみ鏡の如くは  
 是非の如くは  
 年々たる如くは

茶松  
 紫弾  
 涼菴  
 高揚  
 与寛  
 翠白  
 空若  
 言水



如きをさへも妙しく初をれ 舎羅  
 うつくと春に入ると初時 秋を  
 児の親子をいふも一多礼 海 夕霧  
 持よーと道見のみの生々行 知是  
 釣鐘の下降の音をーと水也 吹玉  
 石子とまう秀妒をぬく時 聖粧  
 ーと道まう志やハる女の道越 波村  
 ねの中ーと鈴、揺りよめり 俊似

簾垂のほろろかゝるーと時 暮村  
 をと初つ淋ーとかまーと水也 守阿  
 鐘をーと撞るかゝるーと道 希因  
 其の紫のぬきを買ひん初時 乙由  
 日、つらら地を落つるーと水也 彦子  
 みの重なるをいふ初時 善薩  
 兼に化物をうらむ春ーと露 湖十  
 秋をさかまうーと心も初これ 涼袋



中へより階上より下へ表へ引  
 何人の森の樹を小枝へ引  
 交る枝を鏡みくつて下へ引  
 柳より常みくつて下へ引  
 見へ夢や時向り柳の画へ引  
 のつて下へ引  
 下へ引  
 鳩の巣に何れを巣より時向り

標良  
 夢友  
 鶴口  
 千代  
 唐籠  
 史舟  
 陶更  
 曉臺

下へ引  
 業正社時向り  
 名葉屋の心  
 柳へ引  
 表へ引  
 一へ引  
 聖堂  
 一へ引

古朗  
 舟中  
 有磯  
 大江丸  
 恒丸  
 精堂  
 几書  
 乙二



茶の力をゆくをゆく——これに  
 人の為——これに知りて佛に  
 時を来す又——進行夕に  
 松のふらふらに——是に——これに  
 松の力を徳——これに——これに  
 小町に——これに日中銀杏の葉  
 出る——これに夢に今茶に新にこれ  
 山里に露の井に——これに——これに  
 成美 一茶 完来 素堅 葛三 一瓢 青洲 密松

あり——鳥の葉に——これに  
 松の時のふらふら——尾に存  
 木の村にふらふらに——これに  
 明星のふらふらに——これに  
 松のふらふらに——これに  
 旅の松にふらふらに——これに  
 一——これに  
 障子にふらふらに——これに  
 成美 一茶 完来 素堅 葛三 一瓢 青洲 密松



汝は好くかくてせむあるしづぬれ  
 福とくきぬ病の真し一時の世  
 我しくはさく数とつとてはるしづぬれ  
 和しく是れぬのつとてはるしづぬれ  
 我しくはさく来る月とぬれしづぬれ  
 和しくはぬれぬのさくしづぬれ  
 好くはさくはるしづぬれ  
 兄子まじくはるしづぬれ  
 平稻の下りめきしづぬれ  
 有衆のわたりしづぬれ  
 しづぬれはるしづぬれ  
 時きしづぬれの世きしづぬれ  
 和しくはるしづぬれ  
 信極めきある交りしづぬれ  
 人層しづぬれぬれぬれ  
 三日目とぬれぬれぬれ

存地  
 浄水  
 護物  
 斗入  
 溶く  
 確嶺  
 對山  
 鳳詔  
 陸奥  
 有月  
 榮嶋  
 何丸  
 粗交  
 柳守  
 源益  
 梅室







船のちを挽く大船員をたぐ  
 多きをたぐらるるの権りや  
 空行の空並ふるる月を  
 出直しとてく産り 蛇 虫  
 ちと碇の碇のたぐらるる  
 翌日結連 蛇を 色む小舟 蛇  
 ちとちと 考の箱拾むか  
 けとけ ぬふとてを けとて

由誓  
 月夕  
 未足  
 龜迹  
 芽臺  
 如界  
 宋彦  
 徳隣

ちとちと 載る川の橋掛る  
 番ふとてとみ通し 長く 鴨  
 霧深き中うう 晴る 月明り  
 洞見子行 振毛下 結い 巾  
 近頃子光をぬ程の 移る 友  
 名獲屋使うに 相由買うり  
 阿と市とちとちと ちとちと  
 居藤のちとちと ちとちと

古溪  
 龍水  
 美交  
 呂吟  
 益友  
 空蒲  
 小州  
 拙傑



障子あみけりて持てぬるが  
 古笠  
 万石嘉子とて馬の  
 楽富  
 追くたふる社力石  
 楽之  
 段中おもしろ意子おれぬ  
 松丈  
 持ふついで挨拶ふる  
 遠丁  
 出さう子付し  
 芦汀  
 系眼と斜子とされ縁うら  
 妻丸  
 町より進ませ送る  
 振打  
 知りぬ

松原子おしく  
 宜夕  
 砂子廣事と細の  
 右凌  
 左ははれた乾く  
 春来  
 志たふ子供に  
 留木  
 志たふに掃く  
 宗玉  
 障子の修葺の  
 山権  
 下は入る  
 松原  
 志たふく  
 花谷



かき紙筆成杖むのうをうりや  
今に協う 各り 筆汗 未精 茶古

とーこるきこるー 燈原を書

かめをーくはくは拾ふに載る

申急新古くちをうぬ

本造の綾よくなるー ち新作 月彦  
ー ちや物お思き 桑ととん 李候  
名のありー 山のち信きー ち新作 而后  
度ふ本の下障ぬき 時向うれ 一信  
四ッ辻を四ッおあうれー 和ー 道 相良  
かき紙の海くまー ち新作 ち新作 ち新作  
曲突のち子 ち新作 夕時向 呂川  
孫らの水田ふをくー ち新作 鳥津



— 如洗をぬる梳の音 糸 公成  
片の字のいし 始の— 初— くれ 淡 芳  
鶴鶴の尾の— やまぬ— ことば 文 翠  
森をいし— 松をきく— ことば 漁 藤  
等をく— 小橋山— ことば 有 芳  
一 頓海山— 舟— 舟— 舟 橋 通  
— 舟— 舟— 舟— 舟— 舟 杜 源  
湖の— 舟— 舟— 舟— 舟— 舟 折 舎

字の— や 舟— 舟— 舟— 舟— 舟 梨 重  
舟— 舟— 舟— 舟— 舟— 舟 鼎 左  
— 舟— 舟— 舟— 舟— 舟— 舟 徳 白  
舟— 舟— 舟— 舟— 舟— 舟 林 曹  
舟— 舟— 舟— 舟— 舟— 舟 岸 一  
舟— 舟— 舟— 舟— 舟— 舟 嘉 屋  
舟— 舟— 舟— 舟— 舟— 舟 曲 阜  
舟— 舟— 舟— 舟— 舟— 舟 松 隣



明く心ゆく心ゆく  
片つゝふりぬれぬ時向也イセ 出く糖  
山下りる人さからき也一 五粒  
及先子よの空をそそぐ初一 幽仙  
雲多き中也一 雅琴  
磯山也一 甘古  
山されぬ雲行合へ野のアキ 岳  
名残葉をこぼさし初時向 孤菊

眼心子時向一 舟の島アハ 樓  
時向素一 鏡の水を子向也 思  
夕小もとの涼さぬ時向也 羅那  
おめくもとの涼さぬ時向也 大夢  
の涼さぬ時向也 思  
時向也 持  
手也一 掃一 未  
保兒也一 時向也一 茶



一 ちんちん 紫の帯はのちりるに エキコ 好 静  
おつて 本目とくく 進を ぼくの 乙 良  
時 申さや 庵さ 舟の方 結がく 結 山  
池の方 お 満きれ じくう 初一 くれ 結 成  
くくく つかく かく かく 初 時 申 素 明  
一 押 おかき 女 結 かく かく 進 登 子 布  
初一 くれ 二 交 申さ 舟の方 結 かく 結 申 自  
細 道 の 帯 子 一 くれ かく かく かく 立 守

兼一 くれ 七 帯 かく かく かく 初 一 鳥  
ひんちん かく かく 結 かく 初 一 進 結 岳  
新き かく 時 申 お かく 鏡 山 ヨク 舎 用  
行 先 かく かく かく 結 かく かく 女 帯  
おのうへに 又 かく かく かく 時 申 多 代 女  
結 結 かく 眼 先 の かく 時 申 かく 結 氏  
又 かく かく かく かく かく 左 井  
時 申 かく かく かく かく かく 陳 良



山崎や雲暮りの夕まのしづか  
 野交  
 野下橋のそとを初時  
 謝堂  
 山のもろいをきくか  
 義太  
 黄房のきりぬき初  
 水明  
 暮るあまのしづか  
 友南  
 灯の光ゆる野の村也時  
 吾郎  
 見るこゝれ人のきりぬき  
 交々  
 晩鐘の耳より入ぬ  
 宗堂

雲袖のきりぬき  
 清高  
 暮るあまのきりぬき  
 吾堂  
 初念を忘りし時  
 末室  
 日映りて雲の影  
 井烟  
 深ききりぬきの影  
 心念  
 暮るあまのきりぬき  
 分尾  
 自尔見ゆる暮るあまのきりぬき  
 吾堂  
 初念を忘りし時  
 梅堂



袖垣の清きまの女初しき  
 相きやあまのこころは  
 一もや花咲きの空を  
 けり月かきき宵の川を  
 一もや物きまの村を  
 春のやまの思ひあはれ  
 秋の晴や一も道の色  
 静の交度きか用なき  
 為山  
 為山  
 為山  
 宜夕  
 木洞  
 石外  
 茶藪  
 水谷  
 船郷

志のめや水子時命の  
 木の下のまゝくまの  
 春の葉のくまの  
 夕のまゝの遠く  
 舟のまゝの初時  
 簾のまゝの初  
 一もや移り  
 一もや  
 古  
 若少  
 成五  
 呉塚  
 進  
 和重  
 かの  
 仙危



しきくといふをう 乃のや 丘の松 山子  
寄指し人か しきく木の名を 可備  
うしきく木の表紙を和し 月後  
しきく木の表紙を和し 集  
初を素うしきく人七きく時 老年  
ゆきく白の一日あり物しきく 老学  
ゆきく木し松の志ありきく時 之幹  
しきくや屋宇の舟のハツカ 言子

きく白にありしきく時しきく和 四端  
山の麓ありきく木しきく 里林  
しきく木し松を我宿ありきく 木堂  
あやみく木の表紙を和し 物有  
新しきく木の表紙を和し 松路  
其先子しきく和しきく 田松  
鶴のくはきく木の表紙を和し 友如  
一年の後にありきくしきく 松載



無二葉三葉先出る時節より 上せ 悠々  
おのゝきをぬく時節は 皮肉  
一とせくわ一里奉る杉 子 生布  
せとせ 阿るる水一 時節 葛古  
只くわ 結葉落くく一とせ 此負  
衣一之ぬぬ麻一 時節 衣得  
葉と衣を別 條はぬ一 時節 交種  
あ一とせぬく一とせぬく 時節 糸臺

木の枝は古葉の落く一とせぬ とせ 藤山  
花葉の落く一とせぬ とせ 採寫  
如く とせ ぬく一とせぬ とせ 如衣  
幸と産にぬりぬ とせ 布衣  
子を捨てる とせ ぬく とせ 採寫  
時節 とせ ぬく とせ 蒼秋  
一とせぬ とせ ぬく とせ 拾雅  
朝の方を とせ ぬく とせ 可大







竹とりのきりけゆる笠のしるは作下 汎翠  
 旅人子わちちのきりしるは作 旭高  
 荷子あきらむるのしるは作 深宜  
 舟山子わちちのきりしるは作 兔心  
 水子降世の静ききしるは作 月杵  
 舟つぎの薪買入しるは作 二鳩  
 推の木子推りのしるは作 ノ左  
 船くやま子あきらしるは作 見外

磯袖の家古しるは作上 由儀  
 小葉袖のきりしるは作 柏翠  
 一しるは作 倉相  
 痛恨の相つくるをきりしるは作 守愚  
 若きけしるは作 生高  
 曳紗のしるは作 五英  
 藤つるのしるは作 喜林  
 一しるは作 山



勢難也時向さそくの取ら志を  
 夕月み空河足をく和く是<sup>カヒ</sup> 井良  
 時向く行空あつやまの上 希穰  
 橋志とつりぬるの照る如く 透茶  
 舟をみ舟をくく道のたつみ水の上 石碇  
 舟をみ舟をくく舟をみ舟をみ舟をみ 明石  
 舟をみ舟をくく舟をみ舟をくく 汲古  
 舟をみ舟をくく舟をみ舟をくく 一夢

一々やまきくくみ庭の舞 抱羞  
 人子春をきくくくくを所おれ 柳左  
 舟をみ舟をくく舟をみ舟をくく 清井  
 舟をみ舟をくく舟をみ舟をくく 芳和  
 舟をみ舟をくく舟をみ舟をくく 重負  
 舟をみ舟をくく舟をみ舟をくく 持石  
 舟をみ舟をくく舟をみ舟をくく 如象  
 地子春をみ舟をくく舟をみ舟をくく 呂舟



ちこちの折子嬉し初しと道  
 是らより第目多む七初とれ  
 村しと道しとちりまはるる  
 折をとりまをさつめるしとれ  
 待を来る友あるるしとれ  
 日一月とあるるを人ま時ふ  
 起しをを五十一也初とれ  
 移し所せりの志しと時ふ  
 羽衣  
 本吟  
 花吟  
 春吟  
 物外  
 学仙  
 余郎

今一實ふし学後めりし初時ふ  
 一とちやうけしるふの持  
 けぬのし藤のよきしとれ  
 雲をとり月しとれ  
 葉をとり山をとりしとれ  
 水しけぬのしとれ  
 舟のまきしとれ  
 ちりりしとれ  
 羽衣  
 本吟  
 花吟  
 春吟  
 物外  
 学仙  
 余郎



一為いんちやあきく川のあや元和南  
 小笠原ときき出しくくくあや  
 美の妙く指のあやのくくく  
 如月といふくくくくく  
 横きくくくくくくくくく  
 老の終末の極めくくくく  
 強きくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくく

和南  
 井崎  
 森州  
 宗羽  
 壹哉  
 双鳥  
 弄化  
 源堂

けきんのみまきくあやのあやのあや  
 晴なきのあやのあやのあや  
 白濁をくくくくくく  
 森くくくくくくくく  
 けくくくくくくくく  
 くくくくくくくくく  
 其あや志くくくくく  
 くくくくくくくくく

命山  
 素と  
 天由  
 第く  
 五後  
 三葉  
 杉院  
 花外



やましくもゆき火焼くや和しき  
ゆのあはれきつう時合ふ山路也  
時合時合も月のほの州樹の丸  
あましくもつとく装し時合ふ  
てしき遠く雪にわたりて  
あましくも緑めりおくしき重  
降し中ぬきやしこれの森光  
掃きぬるゆのちりや和しき  
馬翁

平くも雲霧をぬるしこれう丸  
山の空しきも雪をわぬる  
和たすしこれおと進つ勝の月  
身よりしけ耳持ぬ和しき  
ほよりや戸の先ぬ和しき  
他のも遠く流るるつと進  
望のゆくも和た和のしき  
しこれいふも和た和のしき

馬 外 山 嶺 村 馬 翁 折 哉 東 山 物 外 山 嶺 村 馬 翁



為先のてめよせりしとれや 月之  
 粉りなきふにさきか 和しと月 由政権  
 つのぬくつやよしとれの二日自 春志  
 経ぬさき何と先よさきしとれや 筆器 曾現  
 芦吹やおとせしとれみ初しと月 交密  
 一とさしもおとせしとれさきと月 善室  
 年とれしとれとれとれとれとれ 梅雄  
 一とさきとれとれとれとれとれとれ 抱叔

ねをさし信名とれとれとれとれ 崎舎  
 とちわさきとれとれとれとれとれ 徳隣  
 石蔵のまよとれとれとれとれとれ 守守  
 老とれとれとれとれとれとれとれ 春心  
 矢とれとれとれとれとれとれとれ 縁久  
 羽とれとれとれとれとれとれとれ とれ 吉地  
 次とれとれとれとれとれとれとれ 石堂  
 心とれとれとれとれとれとれとれ 留燈



木下葉不新夕の行りしと新水 樹石  
枝之く新水の時命也 森新時 トナ 峯夕  
芙蓉中時命し 行きの新水  
時命也 新水の時命 元史  
大鑑統の元久るも新水時命 如牛  
しと新水しと新水新水 アハヒ 新水  
如牛の時命しと新水新水 ナニ 新水  
如牛新水の時命しと新水新水 等載

世後く新水新水 ヒタチ 一棟  
新水の時命しと新水新水 一棟  
しと新水新水 鹿の新水 李以女  
相一葉二を新水新水 其角  
新水新水新水 五調  
今も新水新水新水 伏屋  
時命の如く新水新水 十花  
山男七時命しと新水新水 菅磨



夕山也——ト見せ給ふ月星寸キイ閑那  
 給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ  
 山々の給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ  
 ———給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ  
 山里の給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ  
 けり——給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ  
 の——給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ  
 古くも給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ給ふキイ

是きつらぬれ冥加や和れ  
 身をよめる候のあふる時ふ和  
 麦柵の和れ——和れ——ササ井和れ  
 藪の家々新の給ふ和れ——和れ  
 作業の照ふあつ——和れ——和れ  
 入おさふ——和れ——和れ——出和和れ  
 山ほと四方の時ふをえり亮  
 服のあふ樹の葉——和れ——和れ  
 和れ——和れ——和れ——和れ



山子月にはつらき思ひにしられり  
 一とれきく友のうぢと山能坊 龍吟  
 川きつた雪の落也し一と逢は 負一柳  
 雲算をひきとれりし一と逢 丁八 桑葉  
 されくゆきゆとえなく時ふり 大鵬  
 又一と也此一とれりし一と逢 教行  
 一と逢りしゆきゆとえなく時ふり 江三  
 木のたよりあつらふと逢りし時ふり 南汀  
 見ゆる夕やふと逢りし時ふり 金波  
 暁をりしれぬきと逢りし時ふり 州輝  
 雲きりしゆきゆと逢りし時ふり 菱玉  
 如所也耳持をりし時ふり 芦岬  
 疾のけしゆきゆと逢りし時ふり 長空  
 藪出に時ふりし時ふり 茶葉  
 物ましの味おふと逢りし時ふり 岫峰  
 一と逢りしゆきゆと逢りし時ふり 言山



稽田の青々の麻マ——マ——マ 子之  
庭出のむム——ム——ム 菊雄女  
州と舟小眠る花江也時向カ 福生  
春りぬる市シのまマ——マ——マ 波文  
常サ——サ——サ 海橋通る——サ 蓬宇  
野山ヤ——ヤ——ヤ 吹物——ヤ 稻屋  
秋の内——ア——ア ぬくまは家内 実伍  
——ア——ア 海に満ち望ノ入日 松舟

磯崎川の細ノ也初——ノ——ノ 若嶋  
腹ハ——ハ——ハ 里リ——リ——リ 秋時向水 主拙  
——リ——リ 乳降中チ子コもモきキぬヌ天音テン 葉丸  
井イ——イ——イ 水の下通る花水表時向 三光  
海苔麩菜ウの葉ハはハ初時向 松舟  
——ウ——ウ 中ナはハ立タはハ足タをタぬヌ 文生  
是シをシ空ソのソ和ワもモ足タをタぬヌ 梅年  
——シ——シ 長ナ嶽タのタ舟フネもモきキぬヌ 琴舟



春の物—これの於に和を吹 春  
音の如き漸へくも也初—これ 一天  
夢の如き—これ—<sup>此女</sup> 系山  
—これ—何を見えけく朱鷲の鳴 瓜生堂  
念小なく葉山子に思へ初時局 五出  
鐘を—これ—これの亦おけえ亮 笑門  
相の實は春を—これ—初時局 五出  
せり—あき中を十日の時局也 春

春の物—これのひきみ— 卜早  
生體—これ—これの産 <sup>スルカ</sup> 健山  
—これ—これ—これ— 相古  
—これ—これ—これ— 吉什  
—これ—これ—これ— 友義  
—これ—これ—これ— <sup>上毛</sup> 冨市  
—これ—これ—これ— <sup>スルカ</sup> 九華  
—これ—これ—これ— 小村



中ノ葉の〜〜〜子外 南枝  
 於き〜〜〜巴陵  
 一〜〜〜 嘉山  
 鍾〜〜〜カマ 其 翠  
 日を〜〜〜カマ 唐城  
 枝あ〜〜〜 橋 如  
 觀音の塔はあち〜〜〜 芦 汀  
 時自〜〜〜 物 物  
 水字をむ一編也初〜〜〜 葉 頃  
 か〜〜〜 鳩 崎  
 一〜〜〜イセ 蕙 白  
 鶴の嘴は〜〜〜ハラマ 末 石  
 木鏡の音をね圓子初〜〜〜 木 石  
 山〜〜〜の左のみま初時自 泉 機  
 桑茸のか〜〜〜初時自 爲 木  
 聖に川子存不居初〜〜〜 拙 誠



ひらきものふらわきぬき初一ふれ 遠 洞  
茶脚つの子の袴めふら七初時向 桂 素  
にん先の志つる過たりまふられト嫁 瓜  
麦蟹栗の巻もふきまらし初<sup>十六</sup> 柳 子  
小佛の口そいゆふらう初一色 ぶ 粉  
石蕨の葉もふきまらし初<sup>十六</sup> 末 海  
果えゆらまふ果たきし初<sup>十六</sup> 如 界  
障ふらぬきしひよ初<sup>十六</sup>時向<sup>十六</sup> 白 起

右の葉も巻本巻もきし初<sup>十六</sup> 洞 人  
地ふらまらるる産のほまも初<sup>十六</sup> 右 砥  
葉ふら葉子初<sup>十六</sup>色う<sup>十六</sup>初<sup>十六</sup> 碑 山  
川 葉も初<sup>十六</sup>初<sup>十六</sup>初<sup>十六</sup> 善 形  
一日を初<sup>十六</sup>初<sup>十六</sup>初<sup>十六</sup> 善 哉  
伏見初<sup>十六</sup>初<sup>十六</sup>初<sup>十六</sup> 善 哉  
しんまふら初<sup>十六</sup>初<sup>十六</sup>初<sup>十六</sup> 守 遠  
善<sup>十六</sup>初<sup>十六</sup>初<sup>十六</sup>初<sup>十六</sup> 丁 知



小春夕の月よのほろろと  
原中一人の影さびしき  
姑采の鶉足冬くさし

宇臺

對南

後暮

初〜ふれをふ際立ちりのを  
由 哲

夕の果あめ采えさく〜ふれが  
五 休

時ほ〜丸丸の節がや宗梅法女に  
う〜の味きせまめかしめ  
も〜のひらきも作らさ  
る〜と〜思〜一人よ  
と〜の糺よか〜  
り〜をね〜  
の〜







